

合同

No. 510

「神の大きな物語の中で」

板橋教会牧師

臼田 尚樹



フランスの画家ポール・ゴーギャンは、晩年の大作に「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」と題しました。これは人間がいつの時代にも抱いている根源的な問いです。わたし自身も、救われる前、このような問いを抱いていました。「わたしはどこから来たのか。人間とは何者なのか。何のために生き、どこへ向かっているのか」と。創世記はその問いにストレートに答えています。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』（創世記1章26節）。ここには、人間の存在の源と生きる目的が明記されています。「支配する」とは、力で押さえつけるのではなく、神の代理人として守り、育て、愛をもって管理することです。

エデンの園において人間は、愛、自由、祝福と共に「戒めの原型」である「原初の戒め」が与えられ、ただ一つ「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」（2章17節）と命じられました。それは、人間が神から自由を与えられながらも、何が善で何が悪であるかを最終的に決めるのは神であることを意味していました。それは、神の領域でした。創造主と被造物の間にある決して超えられないラインでした。しかし蛇は、人間を巧みに騙して「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」（3章4節～5節）と執拗に誘惑します。人間は、このサタンの声に惑わされ、「決して食べてはならない」と命じられた園の中央にある「善悪の知識の木」の実を食べてしまったのです。人間は自分で善悪を定め、神から独立して自分自身が世界の主人になったのです。人間は、神が決める善悪ではなく、自分で善悪を決める裁き主になりました。被造物であることを超えて、サタンと同じような高慢に引き込まれて「神のようになろう」としたのです。ここに罪の起源と本質があります。

本来、人間は「神のかたち」として、すべてを治める者でした。しかし今や、罪の性質をもって被造物を支配するようになったのです。その結果、人間を取り巻く関係に歪みが生じます。神と人との関係、人と人との関係、そして人と被造世界との関係が壊れていきます。罪によって、あらゆる関係が壊れていきました。神のかたちとして互いに助け合い、世界を治めるはずだった人間が、逆に他者を支配し、傷つけ、命を奪う存在になってしまったのです。今日に至るまで人間の歴史は、被造物を苦しめ、戦争と環境破壊を繰り返しています。「被造物がすべて今日まで、共にうめき」（ローマの信徒への手紙8章22節）なのです。

今、多くの分野でAIは人間を助ける可能性を持っています。その一方で、人間の判断そのものを機械に委ねてしまう危険も指摘されています。ユドコウスキーとソアレス共著の『超知能AIをつくれば人類は絶滅する』（早川書房）では、人間よりはるかに高い知性を持つ存在が登場したとき、人間が優位を保てる保証はない、と言います。心を持たないAIの目的・判断・行動を、人間が本当に望んでいる目的や価値観と一致させられるか、という問題です。「善悪の知識の木」の実を食べた人間が、自分より高い知能を持つ「超知能AI」に善悪の判断を委ねるのは恐ろしいことです。

今年5月、ローマ教皇レオ14世は、就任後初となる回勅『マニフィカ・フマニタス』を発表しました。その主題は「人工知能の時代における人間の保護」です。AIを前にして、教皇は、人類はいま重大な岐路に立っていると語ります。「新しいバベルの塔」を築くのか、それとも「神と人間が共に住む都」を築くのか、と。わたしたちは改めて、「人間とは何者なのか。何のために生きるのか」という根源的な問いと創世記の使信に立ち返らなければなりません。

創世記は、人間が神に背き、世界に罪と混乱が広がっても、神は人間を愛して、救い主を通して全世界を祝福する神の救いの計画を語ります。聖書は、律法、歴史、詩、預言、福音書、手紙など、多様な書から成っています。しかし、その全巻を貫いているのは、神が世界を創造し、罪によって失われた者を愛し、ついには新しい天と新しい地へと導かれる、一つの大きな物語（グランドストーリー）です。それはあなたの救いの物語です。